

大事なことを皆で考え決めるために

< 8 >

「食と農」

『おもひでぼろぼろ』の一場面

主人公のタエ子は、姉の嫁ぎ先の実家が山形県山形市高瀬地区で、休みを取ってはそこを訪れ、紅花の収穫やら**有機農業**を手伝っていました。ある日、義兄のまたいとこのトシオと会話を交わします。

タエ子 「ああー、やっぱりこれが田舎なのね。本物の田舎。」

トシオ 「うーん、田舎かあ。」

タエ子 「あ、ごめんなさい、田舎、田舎って。」

トシオ 「いや、それって大事なことですよ。」

タエ子 「え？」

トシオ 「うん、都会の人は森や林や水の流れなんか見て、すぐ自然だ自然だってありがたがるでしょ。でも、ま山奥はともかく、田舎の景色ってやつはみんな人間が作ったものなんですよ。」

タエ子 「人間が？」

トシオ 「そう、百姓が。」

タエ子 「あの森も？」

トシオ 「そう。」

タエ子 「あの林も？」

トシオ 「そう。」

タエ子 「この小川も？」

トシオ 「そう。田んぼや畑だけじゃないんです。

みんなちやーんと歴史があってね。どこそこの曾祖父さんが植えたとか開いたとか、大昔から薪や落ち葉や茸を採っていたとか。」

タエ子 「はあ、そうっかあ。」

トシオ 「うん。人間が自然と闘ったり、自然からいろんなものをもらったりして暮らしているうちにうまいこと出来上がった景色なんですよ、これは。」

タエ子 「じゃ、人間がいなかったらこんな景色にならなかった。」

トシオ 「うん。百姓は絶えず自然からもらい続けなきゃ生きていけません。だから、自然にもねず一と生きてもらえるように、百姓のほうもいろいろやってきたんです。ま、**自然と人間の共同作業**っていうかな。そんなのがたぶん田舎なんですよ。」

タエ子 「そっかあ。それで懐かしいんだあ。生まれて育ったわけでもないのに、どうしてここがふるさとして気がするの、ずーっと考えてたの。はあ、そうだったんだ。」

